スイス・レザン市における国際教育の研究

吉田　　恒

はじめに

日本の高校生や大学生の海外留学者数が2004年度をピークに、これまで毎年のように減少し続けている。1980年代後半から連続して増加傾向にあった海外留学は、日本の経済社会の深刻な停滞期においても活発に推移してきた。21世紀に入ってから留学熱は冷め始め、2005年度から減少の一途をたどっている。公表されている最新の数値によると大学生は57,501人となり、3か月以上の高校生の留学者数は3,257人となった[1]。両者ともに2004年度比で30％の減少となる。一方で、Institute of International Education（2014）によれば、世界中からアメリカへ留学した学生数は、2012－2013年度で約82万人いるが、これは前年度比で7％の増加である[2]。中国からの留学生が全体の29％、インドが12％、そして韓国が９％を占めている。日本人留学生は約２％にまで減少した。この際立った減少傾向の原因を探る研究は様々に行われてきた。必要とされる語学力や高い留学費用が障壁となっていること、帰国後に留年する可能性が高いことなどに加え、留学した高校生にとって日本の大学入試システムが不利となること、留学した大学生にとっては「就活」する上で不利となること、などである。しかしながら、これらは説得性のある原因であるとは言えない。なぜならば、こうした海外留学を取り巻く困難な状況は1980年代や90年代においてより大きなハンディを高校生や大学生に課してきたからである。

それでは日本の若者に何が起こっているのか。ひとつの説得力ある主張として、若者、とりわけ日本の高校生や大学生にとって留学はそれほど魅力的なことではなく、日本の高校や大学は勉強も厳しくなく、友人たちと楽しく学生生活を送れること、そして何よりも日本は安全で日常の食べ物も安価で美味しい、従って、不自由なことは何もない。苦労してまで留学することに意味を見いだせなくなっている、という分析である。異文化や外国語に対する「あこがれ」が弱くなったということであろう。それだけ日本社会が発展してきたということでもあるが、日本は天然資源の少ない国として、将来、より多くを人材に期待せざるを得ない。日本政府はこうした日本の若者の委縮状態を何としても改善して彼らの将来のためにも、そしてまた日本の将来を担う人的資源として成長してくれることを願って、官民を挙げて留学促進のための政策や支援活動を活発に導入しているところである[3]。

21世紀に入り情報技術革命や金融革命がもたらしたグローバル社会にあって、前述したように、特に海外留学に強い興味・関心を示さない日本の若者たちとは対極にいる新興国の学生を安定的に集めている欧米諸国がある。その一方で、既に20世紀初頭から若者のための国際教育のメッカとして世界中の注目を集めてきた国がある。全人教育を土台とする国際教育を提供し、以て世界のリーダーを養成する教育サーヴィスの先進国としての名声を享受してきたスイスである。ヨーロッパの中心に位置する地理的条件から、スイスは周辺諸国との絶え間ない葛藤や中央集権体制と住民自治をめぐる国内の革命に翻弄されながらも、ついに永世中立国として今日まで独自の外交と防衛体制を維持してきた。また、Swissness[4] に象徴されるように、スイスは高品質で付加価値の高い製品やサーヴィスを世界中に提供し続けている。その中のひとつが国際全寮制学校の教育ビジネスである。これまでスイスというと、ホテル・ホスピタリティ・マネジメントの教育、金融業、観光産業、そして時計産業などがその代表的な産業分野として挙げられてきたが、100年以上にわたり脈々と受け継がれてきた国際全寮制の教育は、実は世界中を魅了し続けてきたのである[5]。

欧米諸国が世界から若者を引き付け、そして提供してきた教育は、国際教育への志向というよりは欧米の価値観やビジネスモデルへの志向が根底にあって、そのため新興国からの留学が一般的な形態であった。ゆえに、今日の日本のようにある程度まで経済や社会が発展してきて先進諸国の中に入ってしまうと、いわゆる「留学熱」が冷めてくることは必然である。この意味で、世界中から留学生を集めているスイスの国際全寮制学校が提供する国際教育を知ることは、これからの日本の高校や大学が志向する国際教育の在り方に一つのヒントを与えてくれるものと思われる。グローバル人材の育成を目指して大学だけではなく、中等教育段階からの人材育成に向けたスーパー・グローバル高校（SGH）[6] が、2014年度から指定されている。こうした動きの中で、従来の国際教育が持つ性格、新興国による先進国のビジネスモデルへの「同化」から、より射程のある国際教育の在り方を探ることに意味が出てくるものと思われる。

本稿では、スイス・ヴォー州内のレザン市における International Boarding School の国際教育を概観してみたい。このヴォー州・レザン市を選んだ理由は、スイス国際学校連盟[7] に加盟する会員校が現在45校ある中で、15校がこのヴォー州内にあること、そしてこのレザン市が中でも最も国際的なコミュニティとして発展してきたからである。最初に、レザン市の歴史的背景からみた国際化へのステージと国際教育の観点からみた町の発展段階をみる。また、この町の発展を牽引してきた国際全寮制学校を紹介し、中でも最も歴史のある学校の国際教育をその中心となる IB プログラムに注目してまとめてみたい。そして最後に、スイスの国際全寮制学校が提供する国際教育が、グローバル人材の育成を目指して取り組み始めた日本の国際教育に示唆してくれることをまとめてみたい。

1　スイスのヴォー州・レザン市（Leysin, Canton de Vaud, Suisse）

1.1　歴史的背景

‘Before there was a school, there was the town. And before the town, there was the mountain.’ とレ

ザン市を舞台に50年以上の歴史を持つ国際全寮制学校の記念誌 A School for the World（2010）の中で著者が述べているように、ローヌ渓谷を望むこの町の背後には、2,331 mの Tour d'Aï が Berneuse 山脈の西端に聳えている。この山の南に面して台地が広がっていて、そこにレザン市はある。この台地からは、ローヌ渓谷が眼下に見下ろせ、さらに南に目をやればこの地方の名峰 Dents-du-Midi が3,260mの威容を見せてくれる。しかし、下界の町からはこのレザン市は見えない。LEYSIN AND ITS PAST（2011）によれば、最初にこの高台を安住の地として入植してきたのは、西ローマ帝国が崩壊し、北のゲルマン系や東のフン族などからの侵略・略奪から逃れてきた種族の一部と言われている。この仮説は、ローマ帝国の硬貨がこの町の中で発見されたことにより、正当性があると判断されている。この地域は、12世紀頃にはサヴォワ公の支配に入り、15世紀のブルゴーニュ戦争の後には西スイス地区のヴァリスやヴォーの一部がベルンの支配下となる。渓谷の町 Aigle もこの支配下にあった。そして、その Aigle の管轄地であったレザンはその行政下におかれている。西スイス地区にはブルトン王国が５世紀に建国されたが、人数的にはローマ人がまだ多く、ゲルマン的要素よりもローマの伝統や文化の影響を強く受けていて言葉もラテン語化し、ローマ化の道を辿った。そのため、現在この地域はフランス語圏となっている（森田、2000）。

レザンは、集落の北側が山に守られ、南向きの台地に人々が住み始めた。北風から守られ、ローヌ渓谷からはまさに隠れ道のような細くて長い、急峻な山道があるのみである。下界からはほぼ孤立し、住民は自給自足の生活をしていた。その山道は人が歩いてやっと通れるくらいの道である。140年前まで下界との接触を可能にしていたこの急こう配の道を、実際に筆者は歩いて渓谷の Aigle まで降りてみた。約2時間をかけて移動してみると、当時はさらに困難を極めたにちがいないであろうこの険しい道を人々は荷物を持って、時には小さなラバと一緒に上り下りしていたことに驚かされる（図１－①）。

図１－①　140年前までレザンと渓谷の集落を接続していた唯一の山道。（2014年9月、筆者撮影）

13世紀前半、この集落はドイツ語で Leissins[8] と表記されていて、この意味するところはまさに「歩く」ということであった（Bernard et Frey、2008）。10月も後半になると、しばしば眼下に雲が発生する。それはローヌ渓谷を覆い尽くしてしまい、雲の上にこの集落は浮いてくる。そしてそこは溢れるほどの太陽の光の中に置かれる（図１－②及び③）。それゆえ、下界と雲上とではそれぞれの気候条件が人々の心身の健康に及ぼす影響が顕著であり、それは徐々に明らかになってくる。

図１－②　レザン市から渓谷の町を望む。（2014年10月、筆者撮影）

図１－③　レザン市が雲の上に浮かぶ。（2014年10月、筆者撮影）

1798年に、イギリスの政治経済学者であった Thomas R. Malthus が、An Essay on the Principle of Population as it Affects the Future Improvement of Society の中で、ヨーロッパにおける人々の平均寿命とレザンのそれとの間に驚異的な差があることに言及している。当時のレザン住民の平均寿命は61歳であるという記述が論文の中にある（Malthus、1798）[9]。Malthus のこの描写が、レザンを世界に最初に紹介してくれたものとなる。この研究は、平均寿命を分析することがメイン・テーマではなく、人口は等比級数的に増加するが、食糧は等差級数的に増加する。従って、人口増加に食糧生産は追いつかず、貧困や社会不安が起こる。こうした現象に注目して、人口原理と人間社会の発展をテーマとして分析したものである。レザン住民の平均寿命に言及している箇所の一部を引用してみよう。

In the parish of Leyzin, noticed by M. Muret, all these circumstances appear to have been combined in an unusual degree. Its situation in the Alps, but yet not too high, gave it probably the most pure and salubrious air; and the employments

of the people, being all pastoral, were consequently of the most healthy nature. From the calculations of M. Muret, the accuracy of which there is no reason to doubt, the probability of life in this parish appeared to be so extraordinary high as 61 years. And the average number of the births being for a period of 30 years almost accurately equal to the number of deaths, clearly proved that the habits of the people had not led them to emigrate, and that the resources of the parish for the support of population had remained nearly stationary（注：現在のレザンは、Leysin と綴る）

この Malthus の記述にあるレザン住民の長寿は、その特異な気候条件によることと下界からの接続が容易ではない地理的条件がもたらしたものである。雲の下の渓谷地域に住む人々が被る様々な感染病などから完全に隔離されていたこともその要因として挙げられる。

1820年代の終わり頃になると下界の子供たちが、患っていた「くる病」の治療のためにレザンに上がってくるようになる。降り注ぐ太陽光線により、その症状の軽減と回復を願ったものである。欠乏しているビタミン D が子供たちの体の中に形成されることによりこの病気の治療ができると期待されたのである。こうなると、レザンへのそれまでの急峻な山道に代わってよりアクセスしやすい道路の建設が求められる。1837年に、ほぼ標高1,000m地点の小さな集落 Sépey までの道路ができ、1875年にはついにレザンと眼下にある渓谷が結ばれている。これによりレザンは渓谷地方とスイス国内、ヨーロッパ、そして世界と結ばれることになる。1897年には基幹鉄道が走る下界の町 Aigle と Leysin 間を往復する登山鉄道が開通する。こうした発展期を経てレザンは国際的に認知されるようになり、ヨーロッパ全域から徐々に人々が訪れるようになってくる。この登山鉄道はその後、1915年には Leysin-Feydey 駅からさらに上り、後述する標高1,450m 地点に1892年に建築されていた Grand Hotel まで延長される。このホテルから直接終着駅に出入りできるようになり、世界とレザンのホテル・サナトリューム[10]が直接結ばれたことになる（図１－④）。

図１－④　1897年開通の登山鉄道。Leysin-Aigle 間を結ぶ。
（2014年10月、筆者撮影）

1.2　レザンの発展期

1888年からの準備期間を経て、1890年には Société Climatérique de Leysin S.A.（英語表記で The Climatic Society）という協会がスタートし、レザンのすぐれた気候条件を利用した療養・医療施設の建築と経営が進んでいく。当時、ヨーロッパのみならず世界中に流行した結核の病気療養のための代表的な町としてレザンが認知され始めたときである。東部スイスの Davos や Arosa そしてスイス南西部の Sierre から登った地点にある Montana などと共にレザンは結核療養地としてスイスを代表する町になる。この協会の理事にはメディカル・ドクターのほかに、当時のホテル企業家一族の一員で、1897年に開通した登山鉄道の敷設にも関与した Ami Chessex も入っている（André、2007）。シェセックスは、いわゆるベルエポック時代に、スイス・モントルー地区にあるシオン城近くの Territe からその上の Glion、さらにその上の標高に位置するリゾート Caux の高級ホテル群の建築事業にも手腕を発揮した人物である（河村、2013）。理事会のこのような体制は、療養・医療施設の急激な需要に対して迅速な対応を可能にしたのである。そのため、大規模なホテル・サナトリュームやクリニックが次々と建設されることになる。1892年には120人を受け入れることができる前述の Grand Hotel が完成し、その２年後には、やはり120人を収容する Hotel du Mont-Blanc が完成している。その後、1901年に Sanatorium Le Chamossaire、1902年に Sanatorium Populaire などの大型のホテル・サナトリュームが続いた。町の最も高い標高地点に立つホテル・サナトリュームとして、110人を収容する Les Chamois が1903年に開業している。後述するが、この当時建築されたこれらのホテル・サナトリュームは、その後、教育によるレザンの国際化の動きの中で再び脚光を浴びることになる（図１－⑤）。

図１－⑤　1910年頃のレザンの風景。（Leysin、Photo Nicca 撮影。）

結核には肺結核と肺外結核がある。前者は新鮮なアルプスの空気の中で療養することが中心で、後者は広いテラスでベッド状の長椅子に横たわり、新鮮な空気と太陽光線を終日浴びることがその治療方法として行われていた。このレザン市が結核の療養地としてその名を世界中に知らしめたのは、Dr. Auguste Rollier による Héliothérapie という治療・療

養方法である。彼は1903年にレザンにやってきてその気候条件を最大限に利用した方法を実践した。新鮮なアルプスの空気の中で療養者が太陽光線をたくさん浴びることで結核治療、特に肺外結核である骨や頸部リンパ節の結核治療・療養と精神の健康増進に大きな成果を上げたことから、いわゆるSun Doctorとして世界中に名前が知られるようになる。このヘリオセラピーがレザンで広まったことにより、1906年には150人を収容できるSanatorium Le Belvédère（英国人向けに開業したHotel Les Anglais）が、1909年にはClinique Les Frênesがそれぞれスタートした。この時点で、Dr. A. Rollierが最初に始めたPension Le Chaletは子供の病気治療専門のクリニックとなる。

こうして、1875年まで人口が400人足らずだったレザンにはGrand Hotelが建築された1892年からわずか20年ほどの間に、大小200を超える医療・療養施設が建設されている（André、2007）。郵便局、銀行、商店、登山鉄道の駅などが備わり、レザンはヨーロッパ各地や世界中から人々が療養にやってくる国際コミュニティとしての道を歩むことになる。

1.3　レザンの国際化

これまで見てきたように、レザンはその特異な気候条件と地理的条件のため、結核療養地としてスイスを代表する町のひとつになった。急峻な山道で下界と微かにつながっていた時代を経て、1875年に集落へ上ってくる道路が完成して以来、結核療養や病気治療のために多くの人々が訪れるようになる。登山鉄道の完成がこれに拍車をかけ、秘境にあった町は大きく変貌を遂げることになる。1930年の時点で、80を数えるクリニックが営業し、50人の医師、300人の看護婦、そして3,000人の療養患者がレザンに滞在している（André、2007）。

特異な気候条件が魅了するのは、病気治療や療養に訪れる人だけではなく、彼らに関係する家族、友人、知人、医師、看護婦、そしてホテル、クリニック、サナトリュームの経営者、そこで働く人々、そして商業従事者という具合に多くの人の出入りが観察されたはずだ。いかにこの町が世界中にその名を知られたとしても、すべての階層の人々に治療や療養の機会があったわけではない。当然、社会的にも経済的にも恵まれた人々がその恩恵を最大限に受けることができたことは明らかである。記録をみると、著名な科学者、医師、音楽家、作家などが町に招待され、講演活動や音楽活動などが活発に開催されている。患者として滞在した著名人も多い。Mahatma GandhiやCharlie Chaplinなどもレザンに滞在している（Bernard et Frey、2008）。日本人では、小説家の芹沢光治良がフランスのソルボンヌ大学に留学中に結核を患い、1920年代後半にGrand Hotelで療養している（河村、2013）。

結核の治療や療養の必要がない人々は当然、レザン内に滞在しながらそのとりわけすぐれた気候条件を楽しみ、活発に活動したことは容易に想像できる。一年を通したハイキングや冬季のスポーツなどが行われ、そのための施設や設備、関係するビジネスが興る。徐々に、観光地という様相を呈してくることは明らかだ。既に1903年にはレザンをウインター・スポーツのリゾートとして展開する案が協議されたという記録がある。前述した1903年に開業したLes Chamoisを利用してのスポーツ・リゾートとしての企画が行われた（Leysin Tourism、2014）。この年には、Leysin Sporting Clubも設立され、hockey、skating、そしてbobsleighというウインター・スポーツの機会が提供されている。こうした動きを経て、1923年にLeysin Development Associationが設立され、翌年にはThe Ski Clubが立ち上がる。さらにThe Swiss Ski Schoolも続いた（Bernard et Frey、2008）。しかしながら、当時の状況としては町のほとんどのホテルがクリニックやサナトリュームとして使われていて、また、新たにリゾート用のホテルを建設しても療養のための需要が大き過ぎ、すぐにクリニックとなっていた。このため、スポーツがリードするツーリズムとしては、レザン全体を牽引するまでには至っていなかったと思われる。

前述したように、1930年には療養者が3,000人という記録があるが、その年のレザンの人口は5,698人であった。町の居住者の半分以上が外部から来ていたことになる。農業で生計を立てていた住民は、わずかに244人という記録がある（Leysin Tourism、2014）。従って、既に相当数の旅行者も町に滞在していたと思われるし、町には様々な国籍を持つ人々が生活していたはずだ。レザンには下界と交通ルートで結ばれた1890年代から一気に国際化の波が押し寄せたことになる。

また、この療養地としてのレザンは第一次世界大戦時に多くの外国人兵士たちが結核療養のためにやってきている。1916年にはフランス軍、イギリス軍、そしてベルギー軍の兵士が約6,000人、前述したLe Chamossaireや現在のBeau-Siteに、また、将校たちがGrand Hotelで療養している。さらに、第二次世界大戦時には、スイス連邦と国際赤十字は1945年までの間に10,000人の外国人兵士を療養のためにレザンに送り込んでいる（André、2007）。そしてまた、この地で亡くなった兵士たちの教会に所属しないセメタリーとなる共同墓地がレザンにはある。第一次世界大戦時と第二次世界大戦時に個人としての療養者は激減していたものの、結核療養地としてのレザン経済は危機を経験することなく終戦を迎えることになる。

2　レザン市の経済危機と再興－ツーリズムと国際教育の発展

2.1　クリニック・療養のメッカとしての終焉

これまで概観してきたように、下界から隔離されていたレザンはMalthusの研究論文以降、徐々にその存在が認知されるようになり、まずローヌ渓谷の住民たちへドアは開かれ、1890年代に入ってからはヨーロッパ各地、そして世界へと解放されてきたことになる。その結果、町は驚異的なスピードで発展してきた。また、世界中からやってくる社会的、

経済的に恵まれた人々やその関係者、医療関係者、そして地元の商業関係者たちは豊かで文化的な生活を送っていたことがうかがえる。平和で文化的な生活を享受したベルエポック（Belle Époque）の時代[11]であり、1892年に誕生した豪華な Grand Hotel はその象徴ともなっている（図２－①）。

図２－①　1908年当時の Grand Hotel.（ポストカード）

しかし、1940年代初めまで続いてきた高度安定期ともいえるレザンの経済に急激な変化が訪れた。第二次世界大戦が終わり、西欧・アメリカと東欧・ソ連という東西の冷戦時代が始まり、もはや療養する兵士たちも期待できない状況となる。終戦直前の1943年には結核菌のための抗生物質であるストレプトマイシン（Streptomycin）がアメリカ･ラトガーズ大学の研究室で発見され、この医学上の進歩はアルプスの新鮮な空気と豊かな太陽光線のもとで行う治療と療養生活にピリオドを打った。レザンは瞬く間に居住者が激減し、多くのホテル・サナトリュームやクリニックはすべて空室となった。レザン経済は初めて深刻な危機を迎えることになる。

2.2　ツーリズムの発展と国際教育の誕生

社会情勢と経済の急激な変化を受けて、レザンでは1.3で述べた La Société de Développment Leysin（Leysin Development Association）が新たな町の開発に取り組み始めた。結核治療・療養地として町が大きく発展する中で、既に1903年の時点でスポーツクラブが出来、特にウインター・スポーツを通して療養関係者や町の居住者、さらには旅行者たちの健康増進と余暇の楽しみを提供するツーリズムが芽生えていた。1.2 で言及した東部スイスの Davos や Arosa なども空室となったクリニックを利用した町の再興を企画し、ツーリズムへと移行していた時代である。1956年には Leysin Tour Company ができ、また、Club Méditerranée がレザンにやってきて営業を開始している。この時点で、レザンはウインター・スポーツ及びサマーホリディ・リゾートとして、組織的なツーリズムの展開を開始したことになる。Club Med は、前述の Les Chamois を拠点として活発にウインター・スポーツ事業を展開し始め、Hotel du Mont-Blanc、Sanatorium Le Belvédère、Le Chamossaire などを宿泊施設として再稼働させている（Bernard et Frey、2008）。町にやってくるツーリストが徐々に増え、Grand Hotel が再び稼働し始める。1956年には、レザン内のスポーツ施設も拡充された。また、町の背後に聳える Berneuse へのケーブルカー・スキーリフトも完成し、スポーツ・リゾートとしてのインフラが着々と整備されている。このような動きを受けて、1967年に The Christian Mutualities of Belgium はレザン内に600人を収容する休暇センターとして Hotel Reine Fabiola を建設している。1960年にベルギー国王と結婚した王妃（ベルギー王国の公用語の一つであるフランス語で、王妃を Reine という）Fabiola の名前を付けたものと思われる。このため、毎年の夏と冬にはヨーロッパ中からこの団体の観光客が押し寄せることになる。ツーリズムが牽引してきたレザンの発展は、その後1988年に標高2,048mでの回転レストランの開業や1990年代に入ってからの国際的なスノーボード選手権大会、国際ホッケー・チャンピオンシップ大会などの開催を可能にしてきた（Bernard et Frey、2008）。

Davos や Arosa、Montana という以前の結核療養地域も、空室となったホテルやクリニックを、それぞれツーリズムを興すことで再稼働させて経済の活性化につなげている。Davos はツーリズムの他にも「町おこし」の一環として世界経済フォラムを招致し、世界中にその名を知られている[12]。現在のスイスの観光地あるいは高級保養地とされている地域は、結核療養ビジネスの終焉から、町の再興をスポーツや美しい自然にかけたツーリズムで発展してきている事例がほとんどである。このレザン市もこうした動きと同調していく一方で、もう一つの新たな挑戦が一組の夫婦から生まれることになる。

東西の冷戦が始まる1940年代の後半、アメリカはヨーロッパの要所に空軍基地を置き、軍を駐留させる。ヨーロッパに駐留する軍関係者の子供たちの教育や夏休みの教育活動が課題として顕在化してきていた。1939年に結婚した Fred Ott と Sigrid Benson は、教育や国際的な展望について共に熱い思いを抱いていた。夫は1914年にスイス・バーゼルの生まれ。妻の Sigrid は1916年にアメリカ North Dakoda の生まれで、彼女の両親はアイスランドからアメリカへ移住していた。Sigrid は、1949年にスイスの Interlaken で戦後初めてヨーロッパに駐留する米軍関係者の子供たちのためのサマーキャンプを始めた。その後、ヴォー州の Glion に移転している。このキャンプは Yank Camps（2年目以降、International Ranger Camps）として知られ、初年度に35人、2年目には130人の参加者を集めている。需要が大きくなってきたために、第二キャンプをデンマークで開始する。毎年の参加人数が次第に増加してきたこと、気候条件や自然条件が突出していたレザンの結核療養のためのホテル・サナトリュームに大量の空きがあることなどから、1958年には International Ranger Camps はレザンに移転してくる。このキャンプは米軍の家族だけではなく、ヨーロッパや中東の国々の子供たちにも知られ、様々な文化圏からの参加者を受け入れていた。創立者は、“Everybody brought something that was their own to camp,”と当時を振り

返っている（Sigrid、2010）。このキャンプの経験が、後のInternational Boarding School設立のステッピング・ストーンとなるのである。

これまで述べてきたように、ちょうどこの頃レザンは結核療養のメッカからスポーツ・リゾートへの変身が始まっていて、インフラの整備が急ピッチで進んでいた。キャンプは、レザンでの最初の２年間をLes Chamoisで展開し、その後、1960年にはSanatorium Populaire（現在のSavoy校舎）の使用契約を結び、移転している。この年にFredとSigridはそれまでのInternational Ranger Campsの経験を土台にして、Leysin American School in Switzerland（LAS）を開校する。この契約は、これまで本稿で言及してきたレザンのBelle Époque期の象徴であるGrand Hotelにおいて調印されたものである。LASはこの後、Savoy校舎を取得している。

2.3　レザンの国際教育の発展 -Leysin American School in Switzerland の事例から

前述したSavoy校舎において、LASは1961年に89人の生徒と12人の教員でスタートしている。これが、ヨーロッパで唯一の高校カリキュラムを持つアメリカンスクールとなる。また、1963年には中等教育からの接続を意図してAmerican College of Switzerland（ACS）を設立した。このACSは、1981年にSavoy校舎から移転し、Grand Hotelを借用して運営されることになる。その後、LASはハイスクールの経営に集中するためにこのACSを手放している。ACSはUS Foundationにより、校舎としてのGrand Hotelとともに所有・経営されてきたが、徐々に規模が縮小され、1991年にSchiller Universities Groupに買収されている。最終的に、シラーグループはこれを投資会社に売却し、ACSは2007年に完全閉校となった。これまでの概説の中で何度も登場してきたGrand Hotelは、このPrivate equityが所有権を持ったまま、再びそのドアを閉じたことになる（LAS、2010）。

LASはあくまでもアメリカンスクールとして、ヨーロッパに駐留または駐在するアメリカ人子弟を中心としたハイスクール教育とその生徒募集を行ってきた。従って、ほぼ単一マーケットとなる本国アメリカの社会や経済情勢に急激な変化が発生すれば、その影響は生徒募集に直接現れてくる。1973年の石油危機、そして1974年のニューヨーク株式市場の大混乱からドルは一気に半分以下の価値となり、従って、LASの学納金はそれまでの２倍を優に超える額となる。1980年の在籍生徒数は36人となり、1983年には28人にまで減少した。LAS創立者としてのFredとSigridは学校経営を息子夫婦に譲ることになる。後を継いだSteven OttとDoris Ottは、経営上の大きな方針転換を行った。それは、生徒募集において多様化路線を導入することであった。この時点で、LASは単なるアメリカンスクールから国際全寮制学校としてのアメリカンスクールに変貌することになる。最初に、LAS創立の土台となったサマースクールを改革し、プログラムの名称をSummer in Switzerlandとする。さらに、それまでのスポーツや教科外の活動に特化していたサマープログラムの内容を、Academic and Physical Educationという構成にして学習活動が新たに取り込まれている。この取り組みの成果は、サマースクールの参加者が180名から、その後400名へと伸びたことに顕著に現れてくる。

一方、StevenとDorisは本体であるハイスクールの経営にも改革の手を入れている。アカデミック・プログラムと教育活動の管理・運営を強化して、1987年にはアメリカのMiddle State Association of Colleges and Schools（MACS）の認定とEuropean Council of International Schools（ECIS）の正規会員校としての資格を取得している。前者は、アメリカのハイスクール・ディプローマを保証するもので、後者からは国際学校としてのお墨付きを得たことになる。さらに、1991年にはスイス国内の全寮制学校として初めてInternational Baccalaureate（IB）プログラムを導入している。このことにより、LASはUSハイスクールとIBの二つの正規に認定されたディプローマの取得を可能にしたことになる。世界的な認定基準では、1998年に学校組織としては第一号となるInternational Organization for Standardization（ISO）のISO 9001 status[13]の認定を得ている。これにより、提供している国際教育サーヴィスの質が世界基準で認定されたことになる。

LASは、国際全寮制学校の設立の礎となったInternational Ranger Campsを改革して以来、Summer in Switzerlandは世界中の子供たちを集めてきた。レザンにおいて、これを第一期と第二期に分けて展開している。2001年には、このプログラムに参加する子供たちの発達段階により良く適合するプログラムに再編成している。小学生から高校生までを対象とするプログラムを、⑴ 7-11 age group：Alpine Adventure、⑵ 12-14 age group：Alpine Exploration、⑶ 15-18 age group：Alpine Challengeの３種類に分けたものである。この入口のサマープログラムを強化することは、本体である国際全寮制学校の生徒募集を強化することにもなる。

これまで見てきたように、LASは1983年の経営危機を経験して以来、生徒募集に多様性を導入すること、教育プログラムの強化と認定に向けた取り組み、そして教育サーヴィスの質の向上を柱として経営の立て直しを図ってきた。学校が実践するeducation practices（教育方法）とmanagement practices（学校経営）の構築に力を入れてきたと言える。このような改革の過程を経て、2005年からThe Swiss Foundation for Advancement of International Educationという団体にその所有権が移転されている。経営は創立者一家に委ねられ、国際教育の安定性、継続性、そして方向性が確保されている（LAS、2010）。このような国際教育の発展の経緯とレザン市に対する貢献に対して、市は2007年にLASの創立者夫婦に対してBourgeoisie d' Honneur（名誉市民）の称号を授与している。

その後、LASはIBプログラムの一層の拡大と強化を進

める方針を打ち出し、そのための施設・設備の拡充を計画してきた。その計画の中心は、ACS が閉校となり再びドアを閉じていた Grand Hotel を2008年に買収したことである。19世紀末から20世紀初頭の Belle Époque 期の建築様式を再現すべく大改修を行い、これを LAS の象徴となるメイン・キャンパスにしたのである。新キャンパスは、Belle Époque（BE）キャンパスと呼ばれる。音楽会や講演会にも開放され、レザン市民にも親しまれている。創立ファミリーの2代目である理事長の Dr. Steven Ott は、A School for the World（2010）の中でこの新キャンパスについて次のように述べている。

It is a unique building, historical and phenomenal. Most of all, Belle Époque is both the culmination and extension of our school's mission.

ここで、理事長が言及している LAS のミッション・ステェィツメントについて、LAS の季刊誌から詳しく見てみよう。

"To develop innovative, compassionate, and responsible citizens of the world," defines LAS. Being a citizen of the world through international understanding, is a corner stone of our educational philosophy. Our students share rooms, classes, travel programs, and team sports with friends from the four corners of the world. Compassion is another tenet of our educational beliefs. As boarding education in Switzerland is very expensive, the majority of our students come from the leading affluent families of the world. It is imperative for those students to learn that they must be responsible for those less fortunate than themselves. While there are endless programs with the objective of developing compassion, we have found that living and making friends from different socioeconomic strata in a close environment is the most effective way（S. Ott、2013）.

ここから読み取れることは、IB 教育の拡大と強化を意図してレザンの歴史の中でも中核となる役割をはたしてきた Grand Hotel を獲得し、これを新たな起爆剤として一段レヴェルの高い国際教育の可能性を追求しようとしている。ここに集う生徒たちは、世界60か国以上からそれぞれの文化と生活様式を持って共同生活を送る。経済的にも社会的にも恵まれているこれらの生徒たちは、自国の各家庭にあれば豊かな環境の中で自由な日々を送っていたであろう。その若者たちが国際全寮制という学びの空間においてお互いの文化と価値観の相違を乗り越えながら成長すること、そしてかつて世界の注目を集めたこのレザンで将来のリーダーとしての準備をすることが期待されている。そのための国際全寮制学校の象徴として Belle Époque を獲得したことになる（図2－②）。

図２－②　1892年建築の Grand Hotel。2008年に LAS が取得、その後大改修。（2014年10月、筆者撮影）

2.4　レザンの国際教育の発展 -Kumon Leysin Academy of Switzerland の事例から

レザンが結核療養のメッカとしてヨーロッパはもとより世界から注目を集め、そして多くの関係者が集った19世紀末から20世紀前半、そして2.2で概説したように、その後のツーリズムの発展と Leysin American School in Switzerland の創立と国際教育の展開など、レザンは国際化の波を何度も経験してきた。レザンが他のスイスの観光・スポーツのリゾートと異なるのは、ツーリズムの台頭だけではなく、教育ビジネスによる国際化がこの町の発展に大きな貢献をしてきたことである。その筆頭にあげられるのが、これまで述べてきた1960年創立の LAS であり、次に1990年に開校した Kumon Leysin Academy of Switzerland（KLAS）である。KLAS は、前述した LAS と日本の公文教育研究会が、主に日本人高校生を対象とした本格的な国際教育を提供し、以て将来のリーダー養成を意図して共同設立した高校である。この当時の日本の経済社会は、1985年までの高度安定期からバブル形成期へ移行した時代で、国内における様々な分野での国際化のための事業やプロジェクトが活発に推進されていた時代である。中等教育段階でも高校の再編や国際高校、英語科、国際教養科などが誕生し、高校生や大学生の海外、特に欧米志向が強くなった時代である。西ヨーロッパにも多くの日本の私立学校法人が中学・高校段階の海外校を展開していて、1990年には高校までの正規プログラムを持つ私立学校法人は14を数えた。

この中で、KLAS は1994年までアメリカンスクールと共同で経営されていたことから、LAS が既に始めていた本格的な国際全寮制学校の教育活動や経営方針を土台として学校運営を行っている。ヨーロッパ国際学校連盟やスイス国際学校連盟、スイス・フランス語圏私立学校長連盟などの正規会員校として国際人道支援、スポーツ、芸術分野での活発な交流活動が行われている。1995年以降の単独経営に移行してからは、教育プログラムの独自開発を行い、日本と海外の大学進学プログラムを用意している。また、米国の Advanced Placement プログラム[14]を４科目導入するなど、海外の大学進学を積極的に支援している。KLAS では教科や教科外活

動の全体を通して、日本人生徒に特長的な自己表現力の弱さを克服することや不活発な論理的思考力の伸長を意図した活動が数多く提供されている。このため、授業はもちろんのこと、生徒は学校行事や国際交流プログラムに参加することで、コミュニケーション能力や世界市民としての国際性を伸ばすことができる。彼らはヨーロッパの中心にあるスイス連邦・レザンを拠点として、ヨーロッパ内はもとよりアジアやアメリカなども活動の舞台として国際体験を重ね、世界的視野を持つリーダーとしての準備をしている。

KLAS は創立当初、レザン内のホテルを改築して利用していたが、２年後には、スイス・アルプスのリゾートに最適のシャレーを３棟建設した。教室・事務室・食堂棟、女子寮、そして男子寮が完成して本格的な経営を開始している。また、2000年には特別教室・多目的ホール用シャレーが完成した（図２－③）。こうした発展期を経て KLAS が生徒のために準備している教育プログラムは、その規模と教育効果において、日本国内はもとよりその他の日本の私立学校法人が海外で展開する国際教育を凌駕するものへと成長したのである。

図２－③　この3棟のシャレーの左手にもう１棟女子寮のシャレーがある。（2014年11月、筆者撮影）

KLAS は、2010年に創立20周年を迎え、レザンおいて記念式典を挙行している。渡邉博司校長の式辞には、このユニークな学園の創立当初の苦労と LAS との合弁による国際教育への取り組みが述べられている。

KLAS の起源は、20年まえの1990年にさかのぼります。これまでに日本語・英語バイリンガルの学校というのは誰も見たこともなかった訳で、決して簡単なスタートではありませんでした。遭遇する多くの問題をその都度自分たちで工夫して解決しなくてはならなかったし、このユニークな学校に適したプログラムをゼロから作らなくてはなりませんでした。創設からの4年間は困難な時でしたが、KLAS は LAS から多くのことを学びました。例えば、文化旅行、ファカルティ・ファミリー、アクティビティなどは LAS から引き継いだ財産で、今でもそのことには感謝しています（渡邉、2010）。

ここでも述べられているように、スイスの国際全寮制学校である LAS と共同設立されたことから、KLAS はそれまで海外で展開していた私立日本人学校が提供してきた国際教育とは大きく異なる教育プログラムとマネジメント・スタイルを持っている。公用語は英語、学習指導は英語と日本語、教科外活動、寮教育、そして生徒指導は国際学校の教育方針を基本として運営されている。そこで醸成される学校文化は日本から入学する生徒にとってはまさに本格的な国際学校での学びを意識させるものであった。KLAS がレザンにおいて国際教育を発展させる基礎が創設期において確実に築かれていたことになる。

KLAS がレザンで国際教育に取り組むようになってから、このレザン市には日本からの旅行者が多くやってくるようになる。1990年以前は、極東にある日本からこのスイス・アルプスに在るレザンを訪問する日本人はほとんどいなかった。学校完成年度からは、毎年９月の保護者ツアーでは100名を超える参加者が、そして５月末の卒業式にも卒業生の家族や関係者を含めて100名前後の日本人がやってくる。このため、レザン経済に対しても極めて大きな貢献をしてきた。LAS が世界の約60か国から340人の生徒を受け入れていること、そして KLAS には180人の生徒が在籍し、多くの保護者がレザンにやってくることは、このレザン・コミュニティ全体の国際化と発展に多大な貢献をしていることになる。

このように、レザンは1940年代後半に経験した経済危機から、ツーリズムの発展と LAS 及び KLAS という20世紀後半にレザンにやってきた国際学校が展開する国際教育の発展により、再び世界の注目を集めるようになったのである。

2.5　レザンの国際教育に貢献したその他の教育機関 HOSTA、Village Camps、SHMS

2.3と2.4においては、アメリカの国際全寮制学校である LAS と日本の国際全寮制学校である KLAS が、レザン市における国際教育の発展に寄与してきた事例を紹介した。その他にもこのレザンにおいて、世界中から学生を集めてきた教育機関がある。

その第一は、ホテル経営と旅行業の専門学校として1960年代から学生を集めてきた HOSTA である。1980年代からは、1921年開業の Sanatorium Neuchâtelois（現在の Beau-Site）とこれに隣接するキャンパスの二つの校舎で学校経営をしていたが、前者を1995年には LAS に売却している。残るもう一つのキャンパスに２フロア分を増築して経営を続けてきた。しかし、その後の学生募集が伸びないまま、スイス・モントルー地区の Glion ホテルグループに経営権を譲っている。さらにその後を受け、中国系企業がこれをホテルスクールとして２年ほど事業展開したものの、学生が集まらず、結局、レザンの校舎と寮は2000年前後に Village Camps に売却されている。Village Camps は、1970年代初めにスイスを中心としたヨーロッパ、北米、そしてシンガポールなどの景勝地を舞台に、子供たちのサマースクールを展開している事業者である。プログラムは、‘Education Through Recreation’ を教育方針として構成されており、レザン・キャンパスも世界中から参加者を集めている。

HOSTA が完全に撤退した後、2004年にモントルー地区を拠点とする大規模なホテルスクールである Swiss Hotel

Management School（SHMS）が、1906年に開業したSanatorium Le Belvédère（英国人向けに開業したHotel Les Anglais）をキャンパスとして買収している。SHMSは、1995年からモントルー地区Glionのさらに高い標高に位置する高級リゾートCauxで大学院レヴェルまでのプログラムを提供してきたホテル学校である。1902年に建築されたスイスの歴史的な建築様式を特徴とするCaux Palace Hotelをメイン・キャンパスとして、世界中からホテル経営者を目指す若者を集めている（SHMS、2013）。スイス・ヴォー州のこの近隣には、世界トップレヴェルの評価を得ているレコル・ホテリア・ローザンヌ（EHL）が1893年から、また、Glionには1962年からグリオン大学ホスピタリティ・マネジメント学部も一流の教育を提供している。この競争の激しいホテル・ホスピタリティ・マネジメントを生き抜いてきたSHMSが、ツーリズムと国際教育で発展してきたレザンに第二キャンパスを獲得したのである。

レザン・キャンパスでは、SHMSはさらに1.2で言及した1894年建築のHotel du Mont-Blanc（図２－④）も取得・改修している。このホテルと前述のLe Belvédèreは、道路を挟んで標高差がある位置に立っていることからSky Trainというケーブルで結ばれている。Le Belvédère とHotel du Mont-Blancはそれまでヴァカンス用のホテルとして細々と営業されていたものの、このSHMSの事業展開により、大きなホテルスクールとして再び脚光を浴びることになる。2014年10月に筆者が行ったインタヴュ調査によると、在籍学生数が720人という規模にまで達している。学生の80％をアジア系が占めている。

図２－④　Hotel du Mont-Blanc。SHMSが2004年に改修後、経営を開始。（2014年11月、筆者撮影）

これまで2.3及び2.4で述べてきたように、1960年創立のLeysin American School in Switzerlandと1990年創立のKumon Leysin Academy of Switzerlandが国際教育を標榜し、レザン市の国際化と経済の発展に貢献してきた。21世紀に入ってからは、これにVillage CampsやSwiss Hotel Management Schoolが加わり、世界中から子供たちや学生をレザン市に集めている。こうしてレザンは、結核の療養地としての発展を20世紀半ばに終息した後に、スイスの他の療養地とは異なり、ツーリズムの発展に加えて国際教育を中心とする学校教育とホテルマネジメント・スクールの活発な事業展開がリードする国際コミュニティとなったのである。2014年現在、レザン市の人口は3,878人で、世界の106か国から人々が来て生活している。外国人居住者が人口の60％を超えるユニークな町として知られることになる（Leysin Tourism、2014）。スイス連邦はヨーロッパの中でも外国人居住者が全人口に占める割合が極めて高い国である。全体の人口が、8,039千人で外国人居住者がその23.3％を占めている。国際都市であるジュネーブ市を持つジュネーブ州の全人口463千人のうちの39.7％、国際商業都市チューリッヒを擁するチューリッヒ州の全人口1,408.6千人のうちの24.9％が外国人居住者である（スイスFSO、2014）[15]。このように、スイスの最新の人口動態を調べてみても、レザン市の外国人居住者の割合はスイス連邦の中でも突出していることがわかる。まさに、グローバル・コミュニティの縮図としてのレザンが誕生したのである。

3　グローバル・コミュニティの中に生きる国際教育

3.1　国際教育の原点としてのレザンの国際性

これまで概説してきたように、20世紀半ばの経済危機からレザン市の発展を牽引してきた二つのエンジンはツーリズムと国際教育である。そして、特にその影響力が顕著であった後者をリードしてきたのは国際全寮制学校のLeysin American School in Switzerland（LAS）である。21世紀に入ってから大型のホテルマネジメント・スクールがやってきたが、それはいわばレザンが発展する過程において、より多くの魅力を持つ町へと変貌したことがレザン・キャンパス開校の誘引となったはずである。2.1で述べたように、レザンは19世紀末から20世紀中盤まで結核の療養地として世界中から注目され、多くの療養者と関係者がこの町で生活していた。そのため、異文化を持つ人々がレザンにおいて日々、交流し、豊かな国際文化が生まれていたのである。このレザン特有の歴史的及び文化的背景が、LAS創立の基礎となったInternational Ranger Campsの発展に不可欠な要素であったことは否めない。スイス・アルプスの小さな町が、異質な他者や外国からの居住者を中に受け入れ、共生していくことは容易なことではない。1850年前後に観察され始めたローヌ渓谷の集落との接触から、約100年以上の歳月をかけて育まれた国際性が、その後のレザンの発展を可能にした源泉であると言える。LASとその後に続いたKLASが教育方針とする国際教育の原点はここにある。

それでは、そのLASが牽引してきた国際教育の原点とも言えるレザンの町が育んできた国際性とは何か。1.3でレザンの国際化について概説したように、結核治療・療養のために、世界中からこの町にやってきた患者とその関係者、医師、医療関係者、ホテル･サナトリュームの経営者、従業員、地元農民、商店やサーヴィス業関係者、そして講演活動や芸術活動にやってきた研究者やアーテストなどが共に生きる生活空間が生まれていたことになる。このスイス・アルプスの小さな町において、まさに異文化との共生空間が誕生してい

たのである。この共生空間は、その初期において地域集団内の一部に発生する段階から、多種多様な異文化間の尊敬の念や衝突と解決へ向けた調整などを経ながら時間をかけて地域集団全体に広がり、そして新たなコミュニティ文化が出来上がったものと思われる。発達段階の初期においては、様々な国からやってきた人々が持つ文化は独立したひとつの主体として存在していて、やがて生活空間を共にする過程を経て、コミュニティ全体の共通の利益を求める精神的空間が醸成されることになる。別な表現をするならば、自国文化の中において形成される空間ではなく、異文化との共生を経て成立する第三の公共空間とでもいう意識が生まれてくることになる。年月を経てこの意識はコミュニティ全体に充満し、新たな空気、文化としてそのコミュニティに定着してくるものである。20世紀半ばにおいて、この文化がレザンに育まれていたのである。

国際教育の原点ともいうべきスイス・レザンの国際性は、こうした発達段階を経て形成されたはずである。この国際性がLASのInternational Ranger Campsを成功に導き、その後の国際全寮制学校の創立を促したと言える。学校教育を通して展開する国際教育は、日常生活の中に異文化との共生空間を単に設定するだけではなく、未来を生きる子供たちのために、これを意図的にそして計画的に教科と教科外の教育プログラムの中に組み入れることになる。レザンにおいて国際教育をリードしてきたLASの中核となる教育プログラムとは何か。以下において、検証してみたい。

3.2　Leysin American School in Switzerland（LAS）の国際教育 - 象徴としてのIB教育

3.2.1　International Baccalaureate Programme（IB）の概要について

2.3において、LASの国際教育の発展を時系列にみてきた。1980年代の初頭に経験した経営危機は、生徒集団の多様性及び教育プログラムの強化と認定を目指した改革を断行して乗り越えている。レザン市にあるアメリカンスクールというイメージを取り払い、世界中から生徒が集まる国際全寮制学校という学校の性格が定着していく瞬間である。人間の発達段階で最も多感でかつ成長が著しいと言われる中等教育段階で、生徒はグローバル社会の縮図ともいえるレザンの町に滞在する。その町では、様々な言語、文化、価値観を持つ人々がそれぞれの違いを認め合い、折り合いをつけながら形成してきた公共空間の中で平和に暮らしている。このレザンの持つ国際性に抱かれながら、生徒は異文化と共生するスクール・コミュニティの中で学校が用意する国際教育を受ける。そうして国際性豊かな世界の市民として成長することが期待されている。そのLASの国際教育を代表する教育プログラムが、International Baccalaureate（IB）である。LASが1991年にスイスの国際全寮制学校として初めて導入したこのプログラムを概観してみよう。

IBプログラムとは何か。21世紀のグローバル社会に対応するための国際教育プログラムとして、IBは日本国内でも注目を集めている。政府が主導するスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）が56校指定され、この事業と歩調を合わせるかのように、国際バカロレア教育の導入に向けた動きも活発化してきた[16]。しかし、現時点の日本ではまだ認知度も低いこのIBプログラムについて、その誕生の経緯からみてみよう。

国際的な教育プログラムの必要性は、当然ながら人間の国際間の移動により発生したものである。特に、ヨーロッパのように多くの国が一つの大陸に存在している状況では、家族帯同の移動などは頻度も高く、そのために子弟の教育をどう保障するかは大きな関心事となる。国際機関がある特定の国に設置されていれば、その機関には関係国や同盟国からの公務員が、国際公務員として派遣され、駐在することになる。滞在国での勤務期間を終了し、帰国する際には子弟の本国における受入教育機関のことが、さらに頭を悩ませることであろう。赴任地においては子弟が現地校にて就学を続ける、それとも本国の学校教育に準ずるカリキュラムで本国が認証する教育を行う学校（日本人であれば、日本人学校など）で学ぶか、あるいはまたインターナショナル・スクールで学ぶかという選択肢がある。どれを選んだとしても教育の接続という意味では苦労することになる。このように考えてみると、国際連合（1946年）や関係する地球規模の国際機関（例えばUNESCO、1946年）など多くの国際機関が活動を開始した頃から、国際的に認知される教育プログラムの必要性が存在していたはずである。西村俊一（1989）によれば、国際的なバカロレアとして、「ヨーロッパ共同体（EC）」のEuropean Schoolsに関するEuropean Baccalaureateがあり、1957年に学校設立基本法であるStatute of the European School（ヨーロッパ学校規約）とRegulations for the European Baccalaureate（ヨーロッパ・バカロレア規約）が調印されている。「国際バカロレア」教育は、これに続くものであると述べている。また、国際バカロレア機構（IBO）によれば（General Guide to the International Baccalaureate, IBO 1980）、国際バカロレアの成立過程は、準備期（1963～1969）、実験期（1970～1976）、実行期（1976～現在）の3期に分けられると紹介している。西村は、1963年にスイスの国際学校において共通の現代史を教えるための研究会が開催されているとも述べている（吉田、2014）。

ニューヨークの国連本部や国連欧州本部とも言われるスイスに勤務する国連職員の子弟が通う国際学校（インターナショナル・スクール）の教員たちが中心となり、国際的に共通のプログラムを開発した。International Baccalaureate Organization（IBO）によると、1968年に機構が設立され、最初にDiploma Programme（IBDP）が開始されている。プログラムは単に教育の接続を容易にするためにのみ考案されたものではない。人間社会とこれを構成する一人ひとりの生き方を考える、異文化と共生することを通して国際的

視野を持つ、そして平和な人間社会の形成に貢献する人間の育成を目指して開発されたものである。IB が、全人教育プログラムであるといわれる所以である。プログラムはその後、1994年に Middle Years Programme、1997年には Primary Years Programme がそれぞれ導入されている。また、2014年には IB Career-related Programme（IBCP）が正式にスタートした。これは、21世紀の複雑に発展してきた知識基盤社会にあって、建設的な批判力を持ち、自律的、倫理的に思考することができ、他者と協調して生きる人間の育成を目指しているプログラムである。2006年にフィンランドにおいて IB Career-related Certificate（IBCC）として始まり、６年間の試行期間を経て、2012年から IBDP を持つ学校にオファーされていた。その後、すべての IB 候補となる学校に対して提供されている。このプログラムでは、IBDP の２つの教科のコースと CP コアとなる4つの領域を組み合わせることによって、職業に関する学びを深めていくものである。高等教育やインターンシップ、アプレンテスシップなどに向けて準備をするプログラムである（IBO、2014）。

本稿では、Leysin American School in Switzerland（LAS）が1991年に導入した IBDP について、特にそのコアとなる領域に焦点を当て、詳しくみてみよう。

3.2.2　IBDP のカリキュラム構成について

最初に、IBDP のカリキュラム構成を確認しておきたい。概要としては次のようになる。IB の教科群と IB のコア教育領域で構成されていて、IBO のガイド（2011）にあるようにそれらは円形モデル（an IB wheel）によって表される。6つの教科群で囲む中心にコア教育の3領域が位置している。教科の学習とコア領域での学びには密接な関係性がある。すなわち、教科での学びとコア領域での学びは、相互に補完し合い、人間社会を生きる児童・生徒の全人教育として機能するという考え方が根底にある。

⑴　教科群：以下の６つの教科群から各1科目を選択する。それぞれ Higher Level（HL）と Standard Level（SL）があり、３つの HL と３つの SL を履修することが基本となる。

グループ１：Studies in language and literature：Language A（文学）、Language A（言語と文学、文学と演劇）

グループ２：Language acquisition：言語習得

グループ３：Individuals and societies：個人と社会（経済、歴史、地理、ビジネス、情報技術とグローバル社会、哲学、心理学、社会と文化人類学、宗教、グローバル政治）

グループ４：Sciences: 科学（生物、化学、物理、デザイン技術、環境システムと社会）

グループ５：Mathematics: 数学とコンピュータ科学

グループ６：Arts: 芸術または選択科目（音楽、美術、ダンス、映画、演劇、又は上記のグループ1-5から１科目を追加）

これらの６つの教科群から選択する科目での学びは、日本の学校で提供されるカリキュラム構成に近いため、IB プログラムの中では比較的理解しやすい部分である。しかし、この教科群における学びは、いわゆる「知識の詰め込み」を主たる目標として、その知識の多寡を評価する教育の方法ではない。ここでの Teaching ＆ Learning の在り様は、建設的で批判的な考察に基づく研究姿勢を育てること、客観的なデータや分析に基づく他者とのデスカッションを大切にすること、個の成長と人間社会の発展との関係性を理解することを志向するものである。そして、この姿勢は以下で詳しく述べるコア領域の学びと相互に補完し合うことが期待されている。

⑵　コア領域：次の３領域からなる。

領域１：Theory of knowledge（知識の理論：1,600字のエッセイの完成と授業内の発表）

領域２：The Extended Essay（課題論文：4,000語の課題論文のまとめ、提出）

領域３：Creativity, Action, Service（150時間を目安とする活動と振り返りの記録作成）

3.2.3　LAS におけるコア領域の履修形態

3.2.2で紹介したコア領域の履修形態を、LAS の11年生（IB Year 1）と12年生（IB Year 2）の事例から見てみよう。LAS のハンドブックによると、11年生で IB Core Seminar を履修する。これは1年を通して授業に組み入れられていて、評価の対象科目である。このセミナーの内容は、コア領域２の Extended Essay（EE）とコア領域３の Creativity, Action, Service（CAS）のそれぞれの担当教員によるガイダンスとアドヴァイジング、大学への志願に必要な個別エッセイの準備やこれに関係する研究活動、Google platform use など情報技術のトレーニング、そして IB プログラムが目指す教育理念の中心となる思想や LAS が持つ教育理念への個別の取り組みと振り返りによって構成されている。12年生になると、後述するコア領域１の Theory of Knowledge（TOK）を履修することになる。

ここまで確認してきた ⑴ の教科群と ⑵ のコア領域で構成されているカリキュラムをより理解し易くするために、IB プログラムを履修する生徒の IB wheel をみてみよう。以下に紹介するのは、2014年秋学期における LAS の生徒の履修事例である（図3－①）。

図3－①
生徒は履修している IB を円形モデル（wheel）で表している。この例では、円の上段にグループ１の「英語と文学」、左にグループ２の「フランス語」、右にグループ３の「心理学」、下段の左を見るとグループ４から「環境システムと社会」、右のグループ５から「数学」、そして最後のグループ６は、選択科目としての「経済」を履修していることがわかる。４にある ESS は、Environmental Systems and Societies の initials である。そして、この wheel の中心に、上述のコア領域である TOK、CAS、EE が表されていることがわかる。（2014年10月、筆者撮影）

3.2.4　IB のコア領域 - 理論と実践

3.2.4.1　Theory of Knowledge（TOK）-「知識の理論」について

TOK は３つのコア領域の中でもその全体像を把握するに最も難しい学びの分野である。それ故、学習者にとっても教師にとっても手強い存在である。前提としては、学習者に対して教師がすべてを知っていると思わせてはならないし、これを教えるための教科書があるという考えも排除しなくてはいけない。TOK guide から TOK at a glance を参考にしながらその特徴を以下にまとめてみよう。

TOK is a course about critical thinking and inquiring into the process of knowing, rather than about learning a specific body of knowledge. It is a core element which all Diploma Programme students undertake and to which all schools are required to devote at least 100 hours of class time. TOK and the Diploma Programme subjects should support each other in the sense that they reference each other and share some common goals. The TOK course examines how we know what we claim to know. It does this by encouraging students to analyse knowledge claims and explore knowledge questions. A knowledge claim is the assertion that “I/we know X” or “I/we know how to Y”, or a statement about knowledge; a knowledge question is an open question about knowledge. A distinction between shared knowledge and personal knowledge is made into the TOK guide. This distinction is intended as a device to help teachers construct their TOK course and to help students explore the nature of knowledge.（TOK guide、2013）

高等学校段階の最後の２年間で IBDP を履修することになるが、学習者はそれまでの人生や学校生活の中で大量の知識を仕入れてきた。その知識について立ち止まって考えてみよう。私たちが知っていることのどれほどが本当のことなのか。何かあることが本当であるとした場合、いつ、どのようにしてそれを知るのか。こうした問いに答えていくことは私たちの生きている世界を異なる観点から見ることにもなるし、TOK はその問いに答えていく過程を重視する教育の方法であるとも言える。

知識とは何か。具体的な例として、例えば、「私はコロンブスがアメリカを発見したことを知っている」、と言う場合は、それを「信じている」、ということではないか。なぜならば、それは教科書に書いてあったことで、学校で習ったからではないのか。どのようにしてそれが本当に正しいことであるということを知るのか。「いつ、どのようにして知るのか」という自問に教師は導く。知識として教科書で習ったから、という生徒の回答では結局、議論は元に戻ってしまうことになる。よって、そのことの正しさを正当化する議論が必要となることを認識させる必要がある。説得性のある正当化もあれば説得性の弱い正当化も当然出てくる。その際に、明瞭であること、論旨に一貫性があること、嘘や偽りがないこと、事実に正確であること、というような普遍的な知性に基づく議論が必要となる。こうした思考パタンに学習者を導くことが求められる。そこで、TOK ガイドが述べる８つの Ways of Knowing（WOKs、知る方法）を確認してみよう。以下の中から４つを授業で学ぶことが推奨されている。

⑴ language, ⑵ sense perception, ⑶ emotion, ⑷ reason, ⑸ imagination, ⑹ faith, ⑺ intuition, and ⑻ memory.

これらの知る方法は、TOK では次の二つの役割を果たすことになる。

⑴ they underlie the methodology of the areas of knowledge, and

⑵ they provide a basis for personal knowledge.

また、TOK の授業では the areas of knowledge（知識の領域）として８領域を設定している。知識を得る領域としてそれぞれは特徴があり、異なる獲得の手段を持っている。授業ではその中から６つの領域を取り扱うことが求められている。

⑴ mathematics, ⑵ the natural sciences, ⑶ the human sciences, ⑷ the arts, ⑸ history, ⑹ ethics, ⑺ religious knowledge systems, and ⑻ indigenous knowledge systems.

3.2.4.2　LAS における TOK の授業展開について

3.2.4.1において、TOK の持つ性格やその運営の概略をみてきたが、それでは実際の授業展開はどのようになるのか。LAS の TOK の授業風景を見てみよう。授業は、TOK 担当

教員の一人である Mr. D. Hitchcock のクラスから。15人のクラスで、前時の復習を question-based opening で開始する。次に、生徒全員にそれぞれ2枚、細長い用紙を渡す。用紙には様々な情報が記載されている。全員にその用紙が配布されてから、生徒は3人のグループを組み、それぞれが手に持っているペーパーの情報をもとに、「何が起こったのか」、そして「なぜ起こったのか」の causation に関心を持って情報の共有を開始する。5つのグループは、それぞれ適当なスペースに位置しながら、情報交換をする。やがて今度は、各グループがその段階で獲得してはいるがまだ関係性が明らかに見えてこない情報を声に出し、グループ同士の情報共有段階に移行する。キーとなりそうな日時や出来事、周辺の情報、因果関係などを水性マジックで教室の窓ガラスに書いていく。この過程において、やがて2つの大きなグループに収束してくる。「何月何日に何が起こったのか。何時に誰が死んだ。原因は何か、なぜそうなったのか。」を調べる。そうして最後に、この2つのグループが得た情報をもとに一つの物語を完成することになる。ここまでの活動をまとめると、生徒たちは各々に渡されたスリップ2枚を基に、What happened? When and Where? Why? Any indication of dates/time? Relevant information? などを小グループによる社会的活動からクラス全体の協力体制へと進み、情報を共有しながら解決したことになる。教師はこの間に、次のような板書を行っている。

⑴ **Historians ask:**
Who are the characters?
Who was killed?
Why was he killed?
Who benefits?

⑵ **Methods Historians use:**
Reconstruct physical events
Develop chronology
Evidence
Source

約20分後に生徒は全員席に戻る。教師のリードにより、クラス全体で上記の⑴と⑵について、justification（正当性）を議論していく。この後で、生徒はノートに Historians' Approaches をまとめる時間を与えられる。授業の最後では、翌週から始まる LAS の Cultural Trips（学校の文化旅行）について、この TOK グループがトルコを訪問すること、その際に、いくつかの遺跡を訪れることになるが、様々な角度からそれらを観察して evidence や sources を得て、物語を作り上げることを確認した。教師の言葉では、try to construct a story であった。

実際の TOK の授業は以上のように展開されていた。ここで明確に判ることは、この授業は上述した the areas of knowledge（知識の領域）として TOK ガイドに載せられている８つの領域の⑸ history の授業であることだ。授業では、なぜそうなるのか、証拠やその情報源は確かであるかどうかの検証、徐々に形成されていく一つひとつの物語の要素の正当性について説得性のある議論のやり取りが行われる。まさにその訓練を行うための授業ということになる。LAS では TOK 専門の教員が３名いるが、それぞれの教員は前述した８領域の中から６つを選び、１年間のプログラムの中でこのアプローチを取り入れて指導している。

なお、筆者が滞在していた2014年秋学期の中盤、10月後半には TOK Workshop が開催されていた。IBO から講師が派遣されて TOK 担当教員のための研修が行われていた。TOK は生徒にとっても教師にとっても IB プログラムの中核となる領域であることが再確認された。

3.2.4.3　TOK の評価について

さて、このように展開される TOK の授業を受ける生徒の評価はどのように行われるのか。TOK guide（2013）を見てみよう。少なくとも100時間の授業時間を確保することが前提である。そして次の二つの課題が課される。

⑴ **Part 1: Essay on a prescribed title**

IBO が提示する６タイトルから一つを選び、1,600語以内にまとめるものである。TOK 評価の67％を占める。このエッセイの評価は授業担当教員が行うのではなく、IBO の外部評価を受ける。生徒はこれをまとめるに際して、TOK の授業で受けた点に言及したり、授業内や授業以外で獲得した知識に関する意見を参考にしたりしてもよい。知識に関する問いかけをしながら、生徒自身が到達する結論を明らかにすることが求められる。エッセイでは、この問いかけと授業で取り上げられた「知識の領域」や「知る方法」とを結びつけて議論できる力を示す必要がある。具体例を挙げると、「20歳未満のアルコール摂取は健康に良くない。このように言明されていることを、二つの「知識の領域」から評価しなさい。」というようなタイトルが提示される。この part 1における授業担当教員の役割は限定的である。相談やモニターベースに終始する。生徒は図表や参考文献のためのビブリオグラフィを除いて、指定される語数以内にまとめる。

⑵ **Part 2: The presentation**

TOK 授業内での発表。これは、生徒が一人であるいは最大３人までのグループで行うものである。一人当たり約10分の発表。グループでは最大30分となる。TOK 評価の33％を占める。この発表においては、生徒は、現実生活の中で生じてくる知識に関する問いかけを明らかにして、それについて議論することになる。議論を進めていく上で、TOK の授業で得た考え方や概念を使っていく。また、議論していくうちに、その他の知識に関する問いかけも活用して議論を進めていくこともできる。その議論から得られる理解が、実際の生活の中にある他の状況においても意味が出てくることを理論的に発表する。生徒は発表に先立って、発表計画書（Presentation planning document）を授業担当教員に提出する。この発表の最終評価は担当教員により行われるが、その評価は IBO において発表計画書と評価点との整合性を確認され、その上で提出された評

価の調整が行われることがある。

3.2.4.4　Extended Essay（EE）-「課題論文」について

これは課題論文とも和訳されるように学習者が教科外で行う研究課題のひとつである。自身が既に興味・関心を持っていることやある程度の感覚を得ている事柄について調査・研究するものである。その上で、関係する一つの研究領域を選ぶことになろう。主に IB の教科群の中で履修している科目の中から研究領域を確定することが望ましい。自身で行う調査活動において関係するデータの収集・まとめを行い、それらの分析を通して一本の論文に仕上げる力を育成するものである。これは、必修の学習活動で、想定される学習・研究時間は40時間以上となり、研究の成果を4,000語（日本語の約8,000字相当）にまとめるものである。学習者は担当してくれる教員を自身で選び、研究テーマと研究計画の了解を得て研究を進めていく。このスーパヴァイザーとなる教員は、学習者が行う研究の進捗状況の確認や特定領域における研究技術などのガイダンスを行うものの、何をどのようにして調べるかなどの助言は全く行わない。また、論文の校正や誤りの訂正なども行わない。学習者はガイダンスを得るに際しても担当教員とのアポイントメントを取るなど、自らが自身の研究活動を管理しながら進めることが期待されている。EE をまとめるに際して、学習者は次の点に留意するよう指示される。

⑴　Demonstrate an understanding of the discipline's underlying principles,
⑵　Demonstrate an understanding of relevant theories that have developed in the subject areas, and
⑶　Demonstrate that you understand what its tools of analysis are and that you know how to use them.

また、研究領域を確定するに際しては IB Subject guide を読み、研究課題の具体例や評価方法などを確認することが求められている。2014年に新設された研究領域である World Studies に関するガイドを以下に紹介する。

A world studies extended essay must focus on a topic of global significance. This encourages the student to reflect on the world today in relation to issues such as the global food crisis, climate change, terrorism, energy security, migration, global health, technology and cultural exchange.　The student should then explore how their chosen issue may be illustrated in a local context or contexts using specific examples of a small scale, local phenomenon; in this way the student is linking the local to the global（IBO, 2014）.

3.2.4.5　EE のテーマ例 -LAS の IBDP 候補生徒のテーマから

以下に紹介する5つの例は、2013年度 LAS 生の課題論文のテーマである。

⑴　“How did financial crisis of 2008-2009 affect the main economic departments of new tech distribution and the IT market of Almaty as a whole?”
⑵　“To what extent the sanctions affect the life of Iranian students living abroad?”
⑶　Does color influence human behavior and if so how is this used by advertising media?
⑷　An examination of the causes of shifting public opinion concerning the Vietnam War: A close reading of TIME Magazine’s media’s portrayal of the Vietnam War from 1965 to 1972
⑸ The effects of East Japan Earthquake that occurred in March 2011 on agricultural products.

これらのテーマをみても分かるように、それぞれの学習者は自身が体験したことやある程度の知識と感覚を得ていることに関して調査・研究をしていることが確認される。具体例の ⑸ は、日本人生徒による EE のテーマであるが、東日本大震災の影響を扱ったものである。

3.2.4.6　EE の評価について

EE は、すべて IBO が指定する試験官による外部評価となる。0点から最高36点の配点基準によるが、24点と12点の配点に分かれる2つの観点から判定される。この得点の合計が次の A から E までのグループに対応することになる（IBO、2014）。

A work of an excellent standard
B work of a good standard
C work of a satisfactory standard
D work of a mediocre standard
E work of an elementary standard

ここで IBDP の全体の評価について触れておくと、履修する教科群６科目（１点から最高７点）で取得可能な最高得点は42点となる。さらに、これまで説明してきた必修要件である TOK 及び EE の評価結果の組み合わせに応じた得点として最大3点が与えられる。よって、最高得点は計45点となる。IB ディプローマを取得するには、国際バカロレア試験や外部評価及び内部評価を通じて45点満点中24点以上を取得する必要がある。なお、以下に述べる CAS は評価の対象外であるが、３つある必修コア領域の一つとして IB ディプローマの取得に向けて完成しなければならない課外活動である。

3.2.4.7　Creativity, Action, Service（CAS）-「創造、活動、奉仕」について

IBDP が目指す全人教育は、3.2.2のカリキュラム構成において確認したように、教科群の学びと3つのコア領域により展開される。この両者がお互いに補完し合いながら、人間社会における個の成長を促すことになる。CAS による学びは、学習者が自身の限定された学習領域や生活空間をより広

い人間社会において相対化することが前提となる。他者に対する思いやりの精神や人間社会に起こっている事柄に対し、社会の一員として責任を感じて応答しようとする精神を育むことを意図した活動である。また、「多文化に対する理解と尊敬を通じて、平和でより良い世界の実現のために貢献する、探求心、知識、そして思いやりのある若者を育成する。」と IB のミッションが述べているように、目指すところは国際的な次元である。しかし、この大きな目標へはそれぞれが住む人間社会において取り組む日常の小さな一つひとつの積み重ねが大切になってくる。英語でもこのことに関しては、“Think globally, act locally” という表現になる。以下において、Leysin American School in Switzerland（LAS）の事例をみてみよう。

3.2.4.8　LAS における CAS の展開について

前述した International Dimensions に関して、LAS の CAS ハンドアウトは次のように述べている（LAS、2014）。

Working with people from different social or cultural backgrounds in the vicinity of the school can do as much to increase mutual understanding as large international projects.

学校の近くで行う活動であっても、国際的なプロジェクトと同様に相互理解を深めることができると導いている。3.1 で述べたように、国際教育の原点としてのレザン市の国際性が1960年に LAS の誕生を促した。この国際全寮制学校の中で生活することで、生徒は自身とは異なる社会的、文化的背景を持つ他者と共に学校が用意する様々な教育活動に従事する。そして、その学校はグローバル社会の縮図としてのレザンに在る。従って、この LAS のコア領域としての CAS の展開は世界60か国からやってくる生徒集団、教職員、そしてサポート・サーヴィスチームで構成する学校社会とレザン市を主な活動の舞台として行われることになる。Creativity（創造）、Action（活動）、Service（奉仕）の３つの構成要素からなる社会活動について、具体例を LAS の CAS ハンドアウトから挙げてみよう。

C：Arts & Creative Writing, Musical performances, Theatre performances, Model UN, Yearbook Club, Band/Rock School, Choir, Dance, Event Planning Club, and Dance Instruction.

A：Individual/team sports, Hiking & Outward bound Yoga & meditation, Dance, Mountain climbing, Outdoor fitness course, Rowing, Skiing/Snowboarding, Tennis Lessons, and Squash.

S：Habitat for Humanity, Community Service, Peer tutoring, NHS, Village tutoring, Environmental Club, Lavender Ladies, Sethule Trust Charity, and Student Council.

以上のように、CAS の3つの要素はいずれも幅広い活動を包括している。一読してすぐに理解できない活動もある。特に、Service の要素では生徒のグループによる募金活動やネーミングに特徴のあるチャリティ活動などもある。これらの活動は、単なる思い付きによる活動であったり、一人で週に何回かランニングをしたりというような活動では CAS として認定されない。しっかりした目的があること、達成可能な活動であること、計画性があり、取り組み状況や成長が確認されること、まとめの報告をすること、そして活動の結果や生徒が個別に学んだことの振り返りを記録することが求められる。活動期間として LAS では IB Year 1と IB Year 2の少なくても18か月を基本としている。生徒の活動総時間は150時間を超えることが目安とされている。

3.2.4.6で触れたように、CAS は評価の対象外ではあるが、IBDP のディプローマ取得には必修となる活動である。そのため、LAS では履修する生徒はすべての活動の結果について毎回、PC 上の reporting form により CAS コーディネェィターに報告する。これが活動したことの証明となるものである。この担当教員が、履修者全員の報告記録の管理や定期的なアドヴァイジングを行っている。2014年10月に、筆者は CAS コーディネェィターである Mr. J. McKenna にインタヴューをし、生徒から送られてくる報告を逐一見せてもらった。生徒の活動の振り返りは CAS による学びの意義を改めて認識させてくれる内容であった。

4　スイスの国際教育が日本のグローバル人材の育成に示唆すること

4.1　グローバル人材育成の隘路 -「国際理解教育」

本稿の「はじめに」で述べたように、スイスは国際教育のメッカとして100年以上にわたり世界中を魅了し続けてきた。周知の事実として、イギリスやアメリカをはじめ、日本にも私立の全寮制学校はいくつもあるが、それらは現地の教育サーヴィスの文化を強く保持しているという点においてスイスの国際全寮制学校とは異なる。いずれもそれぞれの国内トップレヴェルの大学への進学を第一目標にした教育サーヴィスが中心である。特に日本の場合は、国公立大学や医学部への進学実績のみが異常に信奉されていて、教育産業が煽る私立一貫校の進学競争が中等教育の世界標準における発展を阻害してきたと言える。こうした現実に加えて、21世紀に入り、世界は一気にグローバル社会へと変貌してしまった。日本の高校生や大学生が内向き志向になり、彼らの海外への関心や異文化に出て挑戦する喜びが縮小している。日本を取り巻く世界の変化に追いつくためにも、グローバル人材の育成に向けた中等教育や高等教育段階における国際教育の充実が要請され、現在、官民を挙げて様々な教育政策を組み合わせて若者の支援に取り組み始めたところである。時間的にも歴史的にも長い射程を持つスイスの国際教育が、必ずしも日本のこれからの国際教育に適合するとは言えないが、その視野を広げてくれることは確かである。これまで述べてきたスイス・レザンの国際性とこれを原点とする国際教育、そしてその象徴としての IB プログラムが、日本のグローバル人材

育成に向けた試みに示唆してくれる点は何か。以下において思考を巡らせてみたい。

日本の学校における国際教育が動き始めたのは、1974年のユネスコ総会の勧告を受け、中央教育審議会の「教育、学術、文化における国際交流について」という答申が出されてからである。この答申は、1987年の臨時教育審議会の最終答申「国際化に対応した国際教育の推進」へとつながる。そして、1996年の第15期中教審一次答申「21世紀を展望した教育の在り方について」の中でも国際理解教育の充実が謳われている。異文化理解、自文化理解、そしてコミュニケーション能力の育成がキー・ワードであった（吉田、2012年）。これまでの日本の国際教育の在り方をまとめてしまうと、1980年代後半に急速に進展した日本の経済社会の変化とこれに続く国際化への動きを受けて、学校教育においては外国を知る、異文化を学ぶという国際理解教育がその中心であった。日本の関係する学会の名称も、「日本国際理解教育学会」などにみられるように、外国や異文化を「学ぶ」という姿勢が強く、異文化を訪問して「学ぶ」、異文化を招待して「学ぶ」、異文化と交流して「学ぶ」という意識が強く現れたものであった。異文化に触れることが中心の体験学習という側面が強く、自国文化との違いを認識することに終始したものと言える。基調としてのこの国際理解教育が80年代後半から日本の学校教育において顕在化し始めたのである。高校の再編などにより誕生した国際高校や国際関係学科などの専門学科においても、国際理解教育と外国語教育に重点を置くカリキュラム構成となった。従って、世界の人間社会における普遍的な価値観である個の成長と人間社会の発展との関係性に留意した教育とはならなかった。この意味において、日本の国際理解教育は対症療法的であり、あくまでも「受け身」の学びであったと言える。これは1980年代の学校教育における国際化モデルということになる。この国際化モデルから抜け出すためには、これまでの「国際理解教育」という視点から世界の共通項としての「国際教育」へ移行することが必要だ。ちなみに、前述した「日本国際理解教育学会」の名称も、学会の英語表記をみると The Japan Association for International Education となっている。International Understanding という表記ではない。日本の外に向かって発信しようとする場合、自国を取り巻く異文化や周辺に起こっていることを「学ぶ」活動に終始するというイメージを取り除く必要があるからである。世界の共通認識としての International Education（国際教育）を行うことが、日本社会が取り組み始めたグローバル人材の育成の前提となるべきである。西欧と米国を中心とする価値観の共有とそのビジネスモデルへの同化が根底に流れる「国際理解教育」から、世界標準としての「国際教育」に視点を移してグローバル人材の育成を考えてみたい。

4.2　世界標準としての「国際教育」へ

国際教育とは何か。本稿の3においてグローバル・コミュニティに生きる国際教育に言及し、スイス・レザンで展開されている国際全寮制学校の国際教育を分析してきた。その国際教育を牽引してきた LAS は、レザン市が育んできた国際性を原点として学校経営を行っている。そのミッション・ステェィツメントは、To develop innovative, compassionate, and responsible citizens of the world. である。この教育の使命は、それぞれが学校の教育活動に具現化されている。生徒は、教科や教科外での学びにおいて主体的、創造的に思考し、行動に移すことを奨励され、共生する異文化空間のなかで他者に対する思いやりを持って行動するよう導かれる。そして think globally, act locally を意識しながら人間社会に起こっていることに対して社会の一員としてそれぞれが反応するように指導されている。これが国際教育の核心部分なのである。そして、「多文化に対する理解と尊敬を通じて、平和でより良い世界の実現のために貢献する、探求心、知識、そして思いやりのある若者を育成する。」という IB プログラムのミッションに通じるものである。受け身の学びではなく、実際の行動を通して社会に生きる人間としての力を育成するということである。

また、同じレザン市でこの LAS に隣接する日本の全寮制学校である KLAS は、日本人生徒一般に共通する自己表現力の弱さや極端な消極性を克服すること、そして社会の一員としての当事者意識の育成や身の回りに起こっていることに対して行動する正当性を感じ、反応できる人間の育成を意図している。教科指導においては、学習者の思考活動を制限する知識詰め込み型の授業から、獲得した知識や技術を土台として生徒自身の思考により事態把握や事物認識をする、そして把握や認識したことを生徒が主体的に言語化して教師や他の生徒と意見交換したり、議論したりすることが奨励される。授業中や教科外活動において、生徒の頭の中で捉えられたものは、共通の言語で表現されないかぎり理解されないこと、従って、言語活動を通して活発に「反応する」ことが常に求められる。KLAS のこの教育方針は、LAS における国際教育の核心部分に共通する個の成長と人間社会の発展との関係性を意識した教育方針である。これが国際教育を支える教育哲学である。

LAS と KLAS がレザンにおいて展開している国際教育は、異文化を体験して「学ぶ」ことや外国語教育を受けることが中心となるものではない。前述した、人間の成長にとって基本となる共通の価値観を育む教育であり、これを国際教育と定義していることになる。この要となる部分が欠落したままに異文化理解や外国語教育に終始する教育を受けても、あるいはまた海外留学をしたとしても、グローバルな視点で捉えるものの考え方やお互いの違いを認識してこれを尊重する態度、そして分析的で論理的な思考能力などを育成することは大変難しい。なぜならば、その異文化理解は彼我の違いにのみ意識が導かれ、結果として自国文化中心の考え方に止まる。また、その外国語学習は自国文化に支配されたコミュニケーションのスタイルに強く影響を受けることになり、共通のステージに上がって意思疎通をするという認識が芽生えてこないからである。日本のグローバル人材の育成は、海外に飛び

出したがらない高校生や大学生に対して留学を支援することが中心となるのではなく、学校教育において世界標準としての国際教育を行うことが前提になるべきだ。1980年代の国際化モデルから一日も早く抜け出すことが喫緊の課題なのである。

おわりに

本稿において、スイス・ヴォー州に位置するレザン市の発展とその後の経済危機、20世紀半ばからのレザンの再興及びその過程にみられた国際教育の発展を分析してきた。そして、ヨーロッパ諸国の中でも外国人居住者の全人口に占める割合が極めて高いスイス連邦の中にあって、その割合が人口の60% を超える「グローバル・コミュニティの縮図」としてのレザンの持つ国際性について概説してきた。3.2においては、この国際性を原点とするレザンの国際教育を牽引してきたLASの教育を、その象徴となるIBプログラムに焦点化して紹介してきた。最初にIBプログラムの概要とIBDPのカリキュラム構成について確認した。その上で、IB Wheelで表される履修形態の中心に位置するTOK、EE、CASというコア3領域の教育的特質を調べ、それらの展開例を紹介した。ここスイス・レザン市において発展してきた国際教育は、まさにこのIB教育に収斂されるといっても過言ではない。本稿で何度も紹介してきた「多文化に対する理解と尊敬を通じて、平和でより良い世界の実現のために貢献する探究心、知識、そして思いやりのある若者を育てる」というIBの全人教育の精神が、このレザンにおいて確実に息吹いていることが今回の調査で確認された。また、4章において、国際全寮制学校であるLASとKLASが行っている国際教育から、日本の学校教育がこれまで展開してきた「国際理解教育」を振り返り、それが1980年代の国際化モデルであること、そして世界標準としての「国際教育」へ移行する必要性があることを述べてきた。

グローバル・コミュニティとして豊かな歴史を持つレザン市が育んできた国際性と国際教育を調査するにあたり、LASの創立者、２代目理事長と事務局長、３代目ヘッドマスター、学校広報・管理部長、カリキュラム研究・開発部長、渉外・アジア担当部長、IBコーディネイター、CASコーディネェイター、TOK担当教員、そしてIB履修生徒にインタヴュを行った。また、滞在期間中には複数の国々から訪れていた生徒の保護者にも会い、スイス・レザンの国際教育の機会を選択した理由や感想などを伺うことができた。KLASにおいては、ヘッドマスターをはじめ、副校長、生徒部長、教務部長ほかの教員、事務局長、事務職員、生徒へのインタヴュを行った。いくつかの学校行事へも参加し、国際教育の実際を観察することができた。出会った保護者たちのレザンにおける国際教育の感想から確認できたことは、町の国際性と学校が提供する国際教育に対して強い信頼を寄せているということだ。情報技術が発達しているがゆえに、保護者は自国に居ながらにして様々な情報にアクセスすることができるが、長期休暇で一時帰国する子弟から得られる学校生活の様子や一年間のスクール・カレンダーを経験した後での印象は常に新鮮で、その教育サーヴィスには高い評価を与えている。LASの理事長とのインタヴュで、筆者はスイス・レザンの国際教育には高品質のサーヴィスに対しても言及されるSwissnessが保護者の感情の中に入っていると主張した。これは、多くの保護者との対話から得た感覚であった。学校が提供するいわゆる「教育サーヴィス」に対する保護者の信頼と感情的支援が成立していることを確信したものである。

私たちは社会生活の様々な場面において「サーヴィス」を受けたり、あるいはそれを提供したりしている。いわゆる「サーヴィス産業」という従前の狭義の意味合いから、現在では学校教育も含め、対価を得て付加価値を産み出すビジネスや社会活動全般に対しても使われるようになった。人間の行う社会活動全般が社会の発展に深く関与することから、今後、私たちの社会において「サーヴィス」の占める比重がさらに高まることは必然である。そして、このサーヴィスの本質に関わる研究も進んでいる。京都大学教授の若林直樹は、「いわゆる顧客によるサーヴィスに対する評価は、その外見的な特徴や利便性への満足だけではなく、「顧客経験」すなわちそのサーヴィスから得られる経験や企業と顧客の関係の質と内容への評価が重視されつつある。」と述べている[17]。また、若林は、University of Warwick の Business School で教授を務めた Robert Johnston の研究整理として、「顧客が質の高いサーヴィスを経験すると、感情的なこだわりを見せてくれ、高い顧客の loyalty（愛着・忠誠）につながる。」というサーヴィスにおける emotion と loyalty に関する研究を紹介している。そして、サーヴィスの開発とは顧客経験をデザインすること、と定義する Service Design という研究領域が生まれているとも述べている。本稿でまとめたスイス・レザンの国際全寮制学校が提供する教育サーヴィスは、まさに若林が言うところの Service Design という研究領域に入り込んでいると言えよう。

今回、調査・研究活動の拠点をスイス連邦の Vaud 州・Leysin 市に定め、このグローバル・コミュニティで半世紀以上にわたり国際教育を提供してきた Leysin American School in Switzerland を中心拠点校とした。また、2015年の夏には25周年を迎える Kumon Leysin Academy of Switzerland においても調査・研究活動を行った。この研修期間を通して、両校から多くの協力と惜しみない支援をいただいたことに感謝の意を表したい。

参考文献

Alchin, Nicholas（2003）*Theory of Knowledge*. London: John Murray（publishers）.

André, Maurice（2007）*Leysin Station Médicale, Deuxième édition,* Mont-sur-Lausanne: Atelier Grand.

Beaudouin, David（2010）*A School for the World.* Leysin, CH: Leysin American School in Switzerland,

p. 8.
Bernard et Frey（2008）*LEYSIN-100 ANS D' HISTOIRE.* Lausanne: VPS prod.
IBO（2013）TOK at a glance. *Theory of Knowledge guide,* pp. 8-64.
Leysin（2006）*Leysin-Sous le soleil exactement.* Leysin, CH: Editions Publi-Libris.
Leysin Tourism（2011）*LEYSIN AND ITS PAST.* Leysin, CH: Leysin Tourism.
LAS（2010）*A School for the World.* Leysin, CH: Leysin American School in Switzerland.
LAS（2014）*LAS Student Handbook 2014/2015.* Leysin, CH: Leysin American School in Switzerland.
LAS（2014）*Creativity Action Service at LAS 2014/2015.* Leysin, CH: Leysin American School in Switzerland.
Ott, Sigrid（2010）Recalls in *A School for the World.* Leysin, CH: Leysin American School in Switzerland, p. 29.
Ott, Steven（2010）Talks about Belle Époque in *A School for the World.* Leysin, CH: Leysin American School in Switzerland, p. 42.
Ott, Steven（2013）Closing Words-Help us to help a Syrian Teenager, *Panorama.* Leysin, CH: Leysin American School in Switzerland, p. 52.
SHMS（2013）*Learn the Art of Swiss Hospitality Management.* Caux, CH: SHMS.
http://www.ibo.org/en/programmes/　(IBO, 2014)
http://www.ibo.org/en/about-the-ib/mission/（IBO, 2014）
http://www.swisslearning.com/en/about-us/index-0-84
池田　潔（1949）『自由と規律』、岩波書店 .
河村英和（2013）『観光大国スイスの誕生』、平凡社
門脇厚司（1999）『子どもの社会力』、岩波新書
門脇厚司（2010）『社会力を育てる』、岩波新書
中嶋嶺雄（2010）『なぜ国際教養大学で人材は育つのか』、祥伝社 .
森田安一（2000）『物語 スイスの歴史』、中公新書
吉田　恒（2012）「国際教育の展開 - 私立在外教育施設の事例から -」『桜美林大学教職課程年報』第６号：pp. 123-134.
吉田　恒（2014）「グローバル人材の育成に向けた取り組み -IB 教育が示唆すること -」『桜美林大学教職課程年報』第８号：pp. 123-138.
渡邉博司（2010）創立20周年記念式典での式辞『KLAS NEWS』Leysin, CH: Switzerland.

註

1　文部科学省高等教育局学生･留学課（2014年３月）による。また、文科省による2014年４月発表の、「若者の海外留学を取り巻く現状について」によれば、３か月以上の留学に出た高校生の数も減少している。

2　Institute of International Education の Open doors（2013）から。特に新興国から米国への留学者数が増大していることがわかる。

3　2009年度にスタートした「国際化拠点整備事業」、通称「グローバル30」は日本の大学の国際化のためのネットワーク形成を進めるもの。2012年度から2016年度までの５か年計画で始まった「グローバル人材育成推進事業」は、2014年度からスーパー・グローバル大学等事業「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」や「スーパー・グローバル大学創成支援」に組み替えられている。また、「トビタテ！留学 JAPAN」が2014年から立ち上がり、官民で若者の留学を支援している。

4　スイスの高級時計、銀行ビジネス、製品、観光産業、永世中立国としての矜持と厳格性などに関して言及される場合に使われることが多い。ビジネスの進め方、国の社会システムとその運営など、スイスが世界で信頼を勝ち取ってきた「スイスであること、スイスらしさ」という意味合い。自国民が意識しているだけではなく、世界的にこの swissness が高い評価を意味するようになった背景として、スイスに対する「感情」が入り込んでいる。

5　スイスの代表的な国際全寮制学校がメンバーである。1880年開校の Le Rosey、1882年開校の Brillantmont International から20世紀後半に開校した Leysin American School in Switzerlandまで11校が会員になっている。日本のスイス大使館内に事務局を置いていたが、2012年から独立し、スイス大使館の支援を得ながらスイスでの教育機会に関する広報活動を行っている。日本では毎年、秋にスイス留学フェアが開催されている。

6　急速にグローバル化する社会の変化に対応するために、日本政府は大学からではなく中等教育段階からのグローバル人材の育成に取り組み始めた。その一環として、2014年度には、申請した246校から56校をスーパー・グローバル高校に指定した。５年間にわたり毎年1,600万円の補助を受ける。2010年３月に終了した SELHi 事業の後を受けて策定された印象が強い。社会問題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力の育成など、国際的素養を身に着けたグローバル・リーダーの養成を意図している。

7　Swiss Group of International Schools（SGIS）が正式名称。1965年に European Council of International Schools（ECIS）が設立され、その第一回の会合においてスイス国際学校連盟の結成も話題になる。翌年、1966年に Lugano にて正式に設立される。1969年には第一回 SGIS 大会を International School of Bern にて開催している。2014年現在、45校が加盟している。レザン市があ

るスイス・ヴォー州だけで15校を数える。

8　Leissins はドイツ語から。ローヌ渓谷の町 Aigle からは急峻な細い山道が唯一の接続経路であり、レザンまではこの道を歩いて登ってくる以外に方法はなかった。Leissins はまさに「歩く」という意味であった。13世紀には Leissins, 14世紀に Leisins, 15世紀になり Leysins となった。最後の s が落ちて、現在の Leysin という表記に。LEYSIN AND ITS PAST（Leysin Tourism、2014）から。

9　Thomas Malthus の研究論文は、初版が1798年に匿名で出版されている。1803年に発行した第二版では、スイスなどヨーロッパの複数の国を研究取材に訪れ、その内容を含めて大幅に書き直している。He subsequently revised and expanded the text to such an extent that the second edition（1803）became in content almost a new book. と An Essay on the Principle of Population-Introduction by T. H. Hollingsworth（1973）の中で紹介されている。

10　結核治療・療養にやってきた人々は、ほとんどが最初はホテルに宿泊していた。その後、サナトリュームやクリニックに滞在するのだが、病気療養というイメージを嫌ったことから「ホテル・サナトリューム」という呼び方が一般的になったようだ。

11　19世紀末から20世紀初頭の第一次世界大戦前までの20年ほどの期間を指す。フランスの産業革命が進展し、豊かな文化が芽生えてきた時代。フランスだけではなくヨーロッパ全体がバブル経済の様相を見せた時期を言う。

12　20世紀後半から Davos もツーリズムを中心とした再興に取り組み始めた。ビジネスを呼び込んで「町おこし」につなげるための企画として、スイス・ジュネーブに本部がある「世界経済フォラム」（1971年設立）が主催する「Davos 会議」を招致している。

13　ISO 9001は、企業などが構築する品質マネジメント・システムを世界的な基準により認定するものである。

14　The College Board's Advanced Placement Program が正式名。アメリカのカレッジ・ボードが認定する高校段階で履修可能な大学レヴェルのコースということになる。世界120か国で実施されている。また、世界60か国の大学がこのプログラムを認めている。AP の科目履修を終えて、試験に通ると単位がもらえる。従って、大学へ志願する場合にも有利になるし、また、入学後に当該科目を改めて履修しなくても単位を認定してもらえる。（http://apcentral.colleboard.org から）

15　スイス・ヌシャテルにあるスイス連邦統計局 Federal Statistical Office FSO が発行する Statistical Data on Switzerland 2014の最新データによる。

16　第二次安倍政権において、首相が主導する「教育再生実行会議」が2013年５月の第三次提言の中で、グローバル人材の育成を推進するため、５年後に IB 教育を200校に導入するとした。こうした動きを受けて、日本語による IB 導入のための「連絡協議会」が同年にスタートしている。2014年４月に報告書を文科大臣に提出している。

17　日本経済新聞「経済教室」エコノミクス・トレンドから引用した（日本経済新聞2014年12月16日付）。